博　士（国際広報メディア）　金　　良　俶

学位論文題名

大衆文化と消費社会

－日本社会における「韓流」文化－

学位論文内容の要旨

著者は序章で研究の背景や経緯、論文の構成を説明した後、2章で「文化の産業化」を推進する日本や韓国の基本方針が果たして正しいものと言えるだろうかと問い、フランクフルト学派から今日に至るまでの「大衆文化」や「文化の産業化」に関する立場や考え方の変遷を跡づけながらこれを考察する。まずアドルノとホルクハイマーの「文化産業－大衆欺瞞としての啓蒙」を取り上げ、かれらは、「大衆文化」が独占的政治権力の道具として使われるとき、きわめて危険なものとなるという当時の社会状況に基づく認識から「大衆文化」の産業化を否定していると言い、また「高級な文化」と「低級な文化」を区別するところから帰結するかれらの大衆像はきわめて否定的なものであると指摘する。それがカルチュラル・スタディーズになると、著者が主に取り上げているのはレイモンド・ウィリアムズであるが、総体としての文化の有り様に注目するようになり、大衆もまた文化の担い手であると捉え、かつ、文化の多義性・多様性の保持を求めるところから、フランクフルト学派とは違って、文化の産業化は一概に否定されてはないと著者は述べる。その後、ポスト・モダンの考え方に立つと、社会の有り様は生産から消費へ重点が移動して、いわゆる消費主義の時代が始まり、旧来のハイ・カルチャーとロー・カルチャーの区別はもはや無意味化するとみなされると著者は述べる。ポスト・モダンにおいては経済的な観点から「大衆文化」の産業化をポジティブに評価する反面、消費者の政治意識が希薄化するとも指摘し、ダニエル・ケルナーに倣って「行動的なメディア消費者」の出現が期待されると述べられている。冒頭の問いはこの議論の中で妥当な政策であることが明らかにされるが、果たして「行動的なメディア消費者」が出現しているかの議論は後段の第4章に委ねられる。

3章で著者は、いまや生産から消費へ重点が移動した、いわゆるポスト・モダンの「消費主義」時代において、消費が飢えを凌ぎ、寒さから身を守るなどの（一次的な）必要性から解放されたときに生じる事態、言い換えれば、（二次的な）「心理的な根拠に基づく欲望」（ガルブレイス）を充足させる消費形態について、ジャン・ボードリヤールの消費記号論に則って詳述する。その際に、消費を促すこの欲求は、個人の選好に左右されるというものではなく、経済システムの内在的論理によって諸個人の内部に誘導された機能であり、構造的なものとして理解される。つまり、消費やそれに付随して生産され

る「威信」はあくまでもシステムあるいは構造の問題なのであり、「社会的個人はこの[消費という]義務から免れる《自由》はない」ことが示される。一言で言えば、「消費はひとつの制度である」ということであり、言語や未開人の親族構造になぞらえることができる。著者は差異化された記号として現れる商品がもたらす社会的な「威信」にとりわけ注目して今日の消費行動の特徴を説明するのであるが、それ自体はかつてソースタイン・ヴェブレンがconspicuous consumptionとして摘出した消費形態と同類であるけれども、それが「有閑階級」に局限された特権的な営みではもはやなくて、今日の消費の本質として遍在していることをボードリヤールに沿って指摘している。

著者は文化産業の是非から本研究を始め、当然のことながら、文化の商品化、文化の消費に関心がある。そこで、ボードリヤールが文化の消費をどう見ているかが次に問われるのだが、著者はボードリヤールに見られる文化の二重性に注目する。つまり、文化はいまや商品として消費され、その際に記号としてなんらかの威光を放ち、ある種の地位を物語るわけだが、とはいえ、それとは別に、知識の習得を促したり「自律的な行動を養い育て」たりする面も文化には依然としてあることが示唆され、それは「消費」されるとは言いがたい文化の有り様だとボードリヤールは考える。言うまでもなくボードリヤールの関心は前者にあるのだが、著者はむしろ後者---商品には解消できないとされる「古い」意味合いの文化---に注目し、実際にはこれもまた消費されていると判断して、威信の誇示や「地位獲得」の過程とは別物の文化消費のあり方を探究しようとする。文化はもっぱら「顕示」的に消費されているわけではないということである。著者はここに至ってボードリヤールの言う文化消費の枠組みを乗り越えようし、その事例研究として次の第 4 章で日本における「韓流」文化消費の有り様を考察するのだが、それは一種の「顕示」をきっかけにしているかもしれないが、やがてそれとは違う、別の何ごとかをめざすものへと消費の質が転換しているのだという。

4 章で著者は、「韓流」と称される韓国大衆文化ブームがとりわけ日本の中高年女性層によってどのように消費されているかについて、独自に行ったアンケート結果を論拠に考察し、メディアでしばしば揶揄されているこれら「韓流」ファンの「ミーハー」的なイメージは正鵠を射ていないことを証明する。著者はこのアンケートの自由記述欄に頻出する「相互理解」や「歴史と文化への興味」、「ノスタルジア」、「友人の輪を広げる」という四つの概念あるいは言い回しを抽出し、これらを吟味するわけだが、その結果明らかにされることは、これら中高年女性が「韓流」消費の過程で楽しみながらみずからの「ライフスタイル」をつくり出そうとし、日常生活のレベルで政治的な意識をそれなりに構築していることであり、落ち着いたクールな絆を協同的に形成していることである。これは顕示的な文化消費を超越している。著者は第 2 章の後半で言及していた「行動的なメディア消費者」に一脈通じる消費者の姿をここに見出している。最後にこのような消費形態の背後にあるものは何かと著者は問い、政府統計などを参照しながら、これらの女性層が「自分や身の回りを静かに変えようとする心の変化」を指摘する。顕示的な消費が垂直の移動を志向するとすれば、ここには隣人・友人の集団性を重視する、水平的に広がる関心があると言う。このようにして著者はボードリヤールの言う文化消費の形態の補完を試みたわけである。

学位論文審査の要旨

主　査　　教　授　　宮　下　雅　年

副　査　　教　授　　山　田　吉二郎

副　査　　教　授　　山　田　義　裕

学 位 論 文 題 名

大衆文化と消費社会

－日本社会における「韓流」文化－

審査に当たって去る２月５日に公開口頭試問を行い、著者による本論文の解説と小１時間に及ぶ活発な質疑応答の後、審査担当者間で講評を行い、そこでは次のような意見が述べられた。

１．韓国の文化産業政策を論じるにあたって、「大衆文化と消費社会」という理論的枠組みの考察から始めたのは大変によい。
２．２～３章で、批判理論、カルチュラル・スタディーズ、ポストモダニズムと検討を進めてきて、最終的にボードリヤールに依拠したのも論理的で納得が行く。
３．特に２章は網羅的に文献を参照しながら文化産業に関する立場の違いを実証的に明示している点で評価できる。
４．３章でボードリヤールを分析して、「威信」という視点を摘出した点、また「文化の二重性」を発見した点は、これによって後の議論の枠組みが明快に示されることになり評価できる。
５．ボードリヤールが暗に指摘した文化の二つの側面を「文化の二重性」として明示し、それを「韓流」文化消費の分析に応用したのは、この論文のオリジナルな成果の一つである。
６．４章の日本における「韓流」文化消費の分析で、その中核となっていると思われる中高年女性層について、これまで等閑視されてきたその消費行動の諸相を明るみに出そうと果敢に取り組んだことは評価できる。
７．「韓流」現象が一過性のブームに終わらず、この担い手の中高年女性は「韓流」を文化行動として楽しみ、自分たちのライフスタイルを変え、韓国の歴史・文化を学ぶことで政治意識を高めていったという著者の主張は、アンケート調査の分析から説得力あるものである。

本論文は著者がこれまでに予備論文として発表したものをほぼ踏襲する形で２章、３章にしており、それぞれ単独のものとしては、上記の意見に見られるとおり、高い評価を受けたが、これらと４章の接合に著者は苦心したらしく、事実、評議において指摘された問題点はこのことに集中した。以下にその種の意見を列挙する。

８．第４章の日本における「韓流」の分析は、前章までに培ってきた「威信」の視点を十分に生かしきれていない。「威信」の視点から一歩踏み込んで分析すれば、「韓流」のデータは、ほとんどがそれで説明できるとも言える。「相互理解」も「ノスタルジー」も、最終的に「威信」に帰結させる分析は可能である。大半を「威信」で説明して、最後に残るものを「もう一つの視点」で分析すれば、いいものとなったと思う。そうして、その「もう一つのもの」とは何なのか、それをきちんと概念化すれば、論としては完成したと思う。

９．従来の「意味の象徴的体系」としての文化と、消費社会における「記号の体系」としての文化の違いを、より掘り下げて考える必要がある。これが不十分だと、第４章の「韓流」現象を分析する際のキーコンセプトである「文化の二重性」が説得力に欠けるものになってしまう。

10.「韓流」現象が「象徴体系」としての文化として受容されていった点を強調するあまり、もう一方の「韓流」現象が「記号体系」の文化としていかに消費されていったか、すなわち、なぜ文化商品として市場に出回りブームを引き起こしたかについての分析が手薄になっている。「韓流」現象を「文化の二重性」の仮定に基づき、二つの異なる観点からそれぞれ分析し、それを統合するというステップを踏むべきであろう。

11. ３章と４章の間に「文化の二重性」を論じる「３．５章」が必要であった。

ボードリヤール「以後」の文化消費形態の局面を新たに打ち出そうとする意気込みから、「顕示」的な消費の射程を狭く見積もった嫌いがあるということである。著者自身もこの「つなぎ」の不備を自覚しており、惜しまれるところである。このほかにも、

12. 中高年女性が「韓流」を生活の一部として取り込むその動機は「心の豊かさ」を求めることにあるというが、これは今後の研究となるだろうし、何故、今日本において、とりわけ中高年女性が「心の豊かさ」を求めているように見えるのかという点について、戦後日本の大衆史に基づく考察が必要となろう。

という論評もあった。

以上のように、本論文はいくつか欠点はあるものも、理論的な枠組みの提示と事例研究のバランスのよさ、広範な文献を扱う目配りのよさ、独自の切り口など、総じてその評価は高く、審査担当者は一致して、研究者として著者の今後の研鑽に期待したいという思いを抱いた。よって、ここに、著者は北海道大学博士（国際広報メディア）の学位を授与される資格があるものと認めるものである。